

Smiles

「小学校英語」が始まる

- ◆教科化へ向けて一今、大切にしたいこと／金森 強 (文教大学教授) 2
- ◆中学校の授業はどう変わるか／本多 敏幸 (千代田区立九段中等教育学校指導教諭) 4
- ◆小学校外国語教育のこれから 6

- ◎ワークシート&絵カード 8
- ◎心を伝える Classroom English / 福田 スティーブ利久 (文教大学准教授) 9

- タブレットを使った反転学習の試み / 鴨川市立田原小学校 10
- 図画工作と連携した外国語活動の実践 / 中嶋美那子 (目黒区立田道小学校主幹教諭) 12
- 豊かなコミュニケーションを育てるアクティビティ / 遠藤恵利子 (仙台市立向山小学校教諭) 13

- ◆英語教育改革に向けて一小学校の先生方へ / 松本 茂 (立教大学教授) 14



教科化へ向けて ——今、大切にしたいこと

平成32年度より、小学校5・6年で「外国語科」として年間各70単位時間、3・4年で「外国語活動」で年間各35単位時間の実施が始まります。小学校教育としてふさわしい英語教育の実現のために、どんなことに気をつけるべきでしょうか。

「小学校英語」が始まる

01



かなもり つよし
金森 強

文教大学教育学部教授

●
第四期中教審外国語専門部会専門委員、
中学校英語教科書「ONE WORLD」(教育出版)著者。
日本児童英語教育学会理事、
日本英語音声学会理事ほか。
小学生への指導経験を踏まえ、
教材開発と全国各地での指導にあたる。
著書に『小学校の英語教育』(教育出版)
『小学校外国語活動の進め方』(成美堂)ほか。

自分の思いや考えを伝えられる授業を

次期学習指導要領では、小学校外国語教育の授業時間数は、現在の70単位時間から210単位時間へと3倍になります。このことは外国語教育の改革において、大きな意味をもつと言えるでしょう。

授業時数の増加で期待されることは、丁寧な指導が行われることで、英語により慣れ親しむ機会が増え、児童がさらに自信をもって自分の思いや考えを伝えられるようになることです。

ALT(外国語指導助手)や友達と関わりながら、個性や創造性を活かした発信の機会をたくさんもつことが望めます。ペアやグループによる協働学習が、クラスの友達のことをより理解する機会ともなります。それは「学びの集団作り」、表現することを通して自己肯定感の育成、社会性の育成にもつながります。もちろん、活動で用いた英語の定着も図られ、中学校の英語学習への準備と動機づけにもな

るでしょう。

高学年では、新たに「読むこと・書くこと」が指導内容に加わります。これまで慣れ親しんできた音声と文字がつながる指導が、小学校段階にふさわしい学びとして起こること、また、全教科を指導する小学校教員ならではの、他教科との連携を意識した指導や教材開発も期待されます。それは中学校、高等学校の英語教育実践にも、これまでとは違う指導観や教材観をもたらすことにもなるでしょう。

文字学習の前に十分な音声指導を

一方で懸念もあります。小学校段階での英語教育が検討されるようになった理由に、長年行われてきた、文字言語(読むこと・書くこと)を中心にした英語学習では、音声言語(聞くこと・話すこと)としての英語力が十分育たないことがありました。また、英文和訳や英語の仕組みを学ぶことが中心の授業では、英語を使う楽しさや意義を感じさせ、達成

感をもち続けさせることが難しく、受験のための学習で終わってしまいがちでした。生涯を通じた自律的学習者を育てることが、これまでの英語教育ではなかなか難しかったと言えるでしょう。

高学年の教科化にあたり、新しい内容となる「読むこと・書くこと」に今、注目が集まっています。しかし、十分に音声に慣れ親しんでこそ、英語の音韻構造や文字への気づきが期待できるのです。文字指導を急ぐのではなく、音声としての英語にふれる機会、特に「聞く」時間を十分に取り、日本語との違いや音声の特徴に気づかせる指導を大切にしたいものです。

また、日本の言語環境を考慮すれば、文字の指導においてもさまざまな工夫が必要になるはずです。英語圏などにおける指導法や教材などをそのまま取り入れることには慎重であるべきでしょう。

外国語を聞いた通りにまねして発話することに抵抗が少ない小学生だからこそ、英語の音声に十分慣れ親しみ、簡単な表現を用いてALTや友達と関わりながら、コミュニケーションの大切さに気づく体験をもつことに、英語教育の大きな意義があります。

異文化との出会いを通じた「気づき」を経ることで、「見方・考え方」が広がり、外国語学習への動機づけにつながる事が期待されます。中教審答申にもあるように、「単なる中学校の前倒しではない」ことをしっかり押さえておきたいと思えます。

カリキュラム・マネジメントにおける留意点

教科化にあたっての一番の課題は、年間70単位時間の実施方法が各学校のカリキュラム・マネジメントに任されている点です。週2コマ45分を実施する学校もあれば、週1コマと15分の短時間学習を3回、あるいは、60分授業と15分の短時間学習を2回、また、週1コマに加えて毎月1回土曜日の授業を実施し、残りは長期休暇期間を利用した交流学习等を実施するような地域もあるでしょう。各学校で異なる条件で指導された場合、中学校入学時に

同じレベルの英語力が身につけていることは困難と言えます。

また、短時間学習の考え方として、「目標を明確にし、まとまりのある授業時間との関連性を確保した上で実施すること」(答申)とされていますが、研究事例はまだ限られており、各自自治体も学校も、手探り状態と言えるでしょう。

短時間学習の実施において、それを担うと考えられる学級担任の負担を考えたとき、指導しやすく学習の成果が形として残りやすい、または評価しやすい、文字のドリル学習等が中心になってしまう恐れがあります。

あるいは、語彙やフレーズを「覚えて言う、練習するだけ」のドリル的な活動が中心になってしまうことも懸念されます。短時間学習が無味乾燥な時間にならないよう、十分な準備と研究が求められます。

相手と心を通わせる言語活動を大切に

英語の授業において特に大切にしたいことは、コミュニケーションの目的、相手、場面、言語の働きなどを考えさせながら、どんな気持ちを伝えるための表現なのかを意識させることです。この、「意味を伝える・表現する」ために重要な役割を担うものに、音声的な特徴として「声の表情(トーン、ポーズ、イントネーション等)」、非言語の特徴として「顔の表情」「体の表情」等があります。これらの表情を大切にしながら、単に「英語を覚えて使う」のではなく、相手と心を通わせるという言語活動の醍醐味を、子どもたちに味わわせたいものです。

英語が教科になっても、小学校教育が全人教育であること、英語教育が心と心をつなぐ「言葉の教育」であるべきことは変わりません。本当の英語力をつけるためには、長い時間が必要です。目に見えやすい成果を求めるあまり、早い段階で英語嫌いをたくさん生み出すことがないようにしたいものです。各学校の「育てたい児童像」にせまる豊かな言語活動を目ざし、あせらずに実践を進めていきましょう。

小学校の教科化を踏まえ 中学校の授業はどう変わるか

すべての児童が3年生から英語にふれ、
4年間を通して210単位時間の授業が行われることにより、
中学校の英語教育は大きく変わることになります。
授業はどのように変わるのか、
また、変えていくべきなのでしょうか。

「小学校英語」が
始まる

02



ほんだ としゆき
本多敏幸

千代田区立九段中等教育学校 指導教諭

中央教育審議会教育課程部会
外国語ワーキンググループ委員。
中学校英語教科書
『ONE WORLD』(教育出版)著者。
ELEC 同友会英語教育学会会長、
英語授業研究会理事。
著書に『若手英語教師のための
よい授業をつくる30章』
『到達目標に向けての指導と評価』
(教育出版)ほか。

外国語活動導入による生徒の変容

平成23年度に外国語活動が導入されてから、中学校の入学生に変化が見られます。文部科学省が平成27年2月に実施した「小学校外国語活動実施状況調査」の結果によると、外国語活動導入前と比べ、中1の生徒に「成果や変容がとてもみられた」または「まあまあみられた」と回答した中学校英語教員は8割を超えます(対象は第1学年担当経験のある教員)。具体的には、「英語の音声に慣れ親しんでいる」、「英語で活動を行うことに慣れている」、「英語に対する抵抗感が少ない」、「英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されている」という点で特に変容を感じているようです。

私も同様に感じています。1年生の最初の授業はあえて英語だけを使って行いますが、以前は「英語、わからない」とつぶやく生徒がいました。しかし、今は本校のどの生徒も英語で授業を行うことを当た

り前として受け入れています。基本的な英語での指示もほとんど理解でき、積極的に英語を使おうとします。また、WhatやWhenなどを使った疑問文や、canを使った文を聞いて理解できる生徒の数も増えました。

小学校で慣れ親しんだ 英語表現を生かして

こうした状況の中、中学校の現在の指導について気になることがあります。それは、小学校でふれた英語表現が、中学1年生用の教科書になかなか登場しないことです。例えば、How manyやWhat timeなどを使った疑問文、助動詞canは教科書の後半で登場します。

せっかく小学校で慣れ親しんだ英語表現も、使わなければ小・中学校で継続的な指導ができていとは言えないでしょう。これまでのように教科書での導入を待つのでなく、小学校で扱われた英語表現や語句は積極的に使用すべきです。普段の授業から耳

で慣らしていき、いざ教科書で扱うときに文法的な説明や練習及び文字を使った活動（読むことや書くこと）を行えばよいのです。

中学校の指導を発想から変える

現在の中学1年生で扱っている文法事項も、小学校でかなりの部分にふれることになります。語彙も600～700語が導入される見込みです。簡単な語句や英文を読むことや書くことにも、少し慣れてから入学してくるでしょう。現在、中学1年生で行っている言語活動も小学校で経験してくることが多くなります。これに合わせて、特に1年生の指導内容や指導方法は変えなければなりません。

まず、文法シラバスで教えるのではなく、言語活動に合わせて必要な文法事項や表現を教えていくという発想が求められます。例えば、4月に自己紹介のスピーチを行わせるとしましょう。教育出版『ONE WORLD English Course 1』（平成28年度版）のLesson 1の冒頭には、自己紹介のモデルとして、次の英文を載せています。“Hi, I am Ayaka. Please call me Aya. Nice to meet you.”

平成32年度以降の生徒たちは、これに加えて自分の好きなことやよく行うこと、できること、中学校で行いたいことなども述べられるはずですが、また、スピーチのあとに、聞き手が話し手に、What color do you like? などと質問することもできるでしょう。このように、入学したての生徒であっても、今より少し高度な言語活動を設定できるのです。

どの生徒にも達成感をもたせるために

一方で配慮が必要なこともあります。4年間英語にふれるということは、中学校入学時点で差があるということでもあります。アルファベットが正確に書けない生徒もいれば、かなり上手に英語を話せたり書けたりする生徒もいるでしょう。そこで、英語が苦手な生徒を支援しつつ、英語のできる生徒も満

足させられる授業が求められます。

「英語の授業がつまらない」という気持ちは英語が不得意な生徒だけでなく得意な生徒にも起こります。どの生徒にも達成感をもたせるためには、生徒によって発問の難易度を変えたり、授業に基礎的・発展的な活動の両方を取り入れたりする必要があります。ペアワークやグループワークを用い、学び合わせることも効果的です。

また、言語活動にしかけを施すこともよい方法です。例えば、ライティング活動を行わせる際、英語が苦手な生徒でもまねれば書けるように、モデルとなる英文を提示する、例文の中に少し高度な英文を載せておき、英語が得意な生徒に積極的に使わせる、などです。

今後、高校で教えられていた文法事項も、中学校でいくつか扱われることになります。このことも、生徒が英語で表現できる範囲が増えるのだと、前向きにとらえたいものです。

言語活動の質を高め 豊かな表現力を育てたい

小学校における英語の教科化を受け、言語活動の質を高め、豊かな表現力を身につけさせることが、中学校の指導で一番行わなければならないことだと私は考えます。文法のドリル活動や教科書本文の和訳や音読で終えるのではなく、題材について深く考え理解させ、自分の考えや意見を英語で述べ合う授業を行いたいものです。また、即興で伝え合うこと、まとまりよく言ったり書いたりすること、目的により読み方を変えたり、語数の多い文章を一気に読み切る指導も必要です。

小学校の指導を受けて、また小・中学校の7年間をかけて、どんな生徒を育てたいのか、どのような力を身につけさせたいのか、目標を立てなければなりません。そして、それらを実現させる方法を考えなければなりません。私たち中学校英語教員も、平成33年度を待つのではなく、できることから取り組みを始めていきたいと思っています。

「小学校英語」が始まる——03

小学校外国語教育のこれから

この度、新学習指導要領案が出されました。新学習指導要領は平成30年度より先行実施が可能になり、平成32年度より全面実施となります。

新設される小学校高学年の外国語科を中心に、新しい目標や内容についてまとめます。

[編集部]

小学校外国語科の基本的な方針

——中教審答申(概要)より

平成23年度から高学年で週1コマの「外国語活動」が必修となりました。中学校の教科とは異なって定着は求められず、基本的な外国語の音声や表現にふれながら、積極的にコミュニケーションを図る態度を育成することを主眼に授業が行われてきました。授業は学級担任が中心に行い、評価については記述によるものとなっています。

これまでの外国語活動の成果や課題を踏まえ、学習指導要領改訂に向けて、高学年での教科化、中学年での外国語活動の必修化が検討されてきました。新学習指導要領における高学年からの「教科型」の外国語教育の導入について、平成28年12月に出された中教審答申(概要)では、基本的な方針が以下のように示されています。

小学校段階では、現在高学年において「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を実施しているが、子供たちの「読むこと」「書くこと」への知的欲求も高まっている状況にある。全ての領域をバランスよく育む教科型の外国語教育を、高学年から導入する。その際、単なる中学校の前倒しではなく、“なじみのある表現を使って、自分の好きなものや一日の生活などについて、友達に質問したり答えたりすることができる”といった、発達段階にふさわしい力を育成する。高学年において、現行の外国語活動(35単位時間)における「聞くこと」「話すこと」の活動に加え、「読むこと」「書くこと」を加えた領域を扱うためには、年70単位時間程度の時数が必要である。

※下線は編集部。

小学校外国語科の目標

答申を踏まえ、学習指導要領案が出されました。以下は、高学年で新設される小学校外国語科の目標案です。以下の(1)～(3)は、小学校外国語科で育成を目指す「知識・技能」「思考・判断・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱と重なります。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

※下線は編集部。

Q&Aで確認

新学習指導要領で どう変わる？



Q1 枠組みと時数はどうなりますか。

A：小学校高学年では「外国語科」となり、週2コマ、年間70単位時間が実施されます。中学年では「外国語活動」として週1コマ、年間35単位時間が実施されます。

Q2 増加する時間の扱いはどうなりますか。

A：15分程度の短時間学習や、45分に15分を加えた60分授業の設定等、各校で柔軟な時間割編成を行うこととされています。

↑ 補足メモ

短時間学習などを行う際には、「指導のねらいやそれを関連付けて指導を行う事項との関係を明確にする」こと、「単元など内容や時間のまとまりを見通して、資質・能力が偏りなく育成されるよう計画的に指導すること」が示されています。

Q3 学習内容はどうなりますか。

A：これまでの外国語活動では「聞くこと」「話すこと」が中心でしたが、外国語科では「読むこと」「書くこと」が加わります。

↑ 補足メモ

「話すこと」が「やり取り」と「発表」の2つに分かれ、外国語科は「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」という5つの領域ごとに、目標を設定します。「読むこと」「書くこと」は、「①アルファベットの文字や単語などの認識、②国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、③語順の違いなど文構造への気付き」など、言葉の仕組みの理解などを促す指導を行います。

Q4 文法指導なども行うのですか。

A：学習指導要領案の「内容」において、「文」および「文構造」の例が示されています。ただし配慮事項として、「指導に当たっては、文法の用語や用法の指導に偏ることがないように配慮し、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」とされています。

↑ 補足メモ

新しい内容として、heやsheなどの代名詞や、基本的な過去形などを扱うことが示されています。外国語活動で取り扱う語を含め、小学校の4年間で600～700語程度の語を扱うこととなります。

Q5 指導者はどうなりますか。

A：高学年・中学年ともに、「学級担任の教師又は外国語を担当する教師が指導計画を作成」します。授業の実施に当たっては「ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材などの協力を得る等、指導体制の充実を図る」とされています。

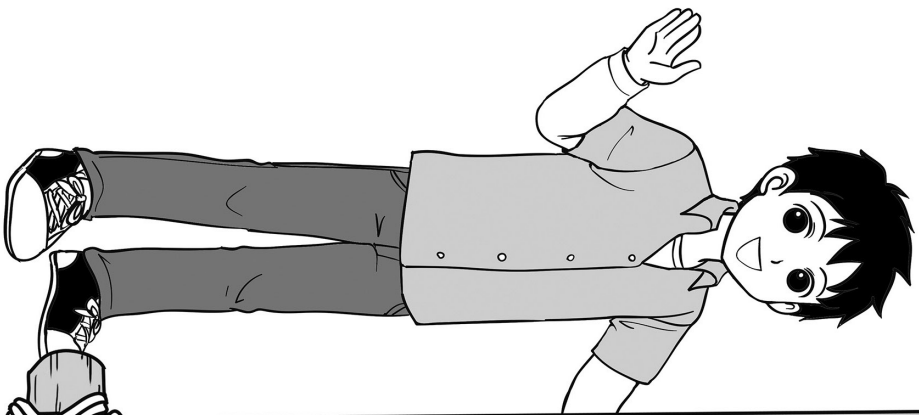
Q6 高学年での評価はどう変わりますか。

A：他教科と同様に観点別評価が行われます。評価の観点は「知識・技能」「思考・判断・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の3つとなります。「外国語活動」については、文章の記述による評価を行うことが適当とされています。

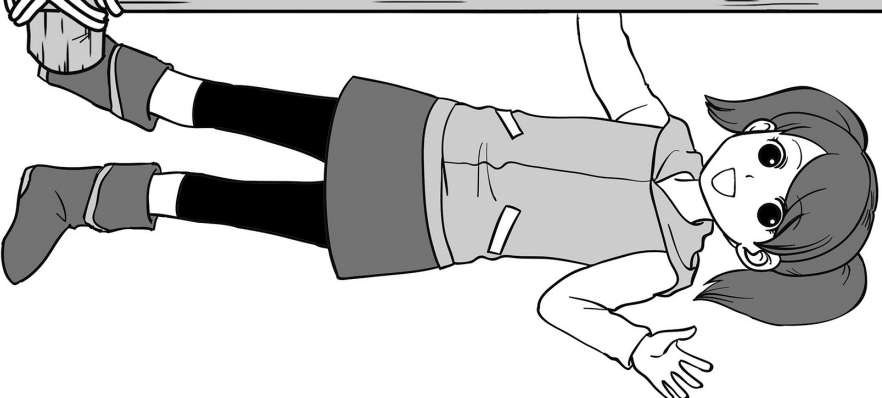
Q7 今後の教材はどうなりますか。

A：文部科学省は、平成30年度から活用できるように3-6年用の新教材を開発し、平成29年12月に先行実施校に配付予定です。内容は児童用冊子、教師用指導書、教室用デジタル教材などです。

※本ページは「中教審答申」「学習指導要領案」「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会資料」等を参考にまとめたものです。



BINGO



Grade () Class () Name _____

心を伝える Classroom English

Classroom English (教室英語)は「人と人とをつなげる」コミュニケーション・ツールです。伝えるために大切なのは、正確な発音よりも、気持ちを込めることです。イントネーションや声、顔、身体表現にも工夫が必要です。Classroom Englishを上手にを使って、児童とのコミュニケーションを深めましょう。



福田 スティーブ利久
文教大学教育学部准教授

第1回 【ほめ言葉】

ほめ言葉の最大の利点は、児童の不安を和らげられることです。教師からのほめ言葉で、児童のモチベーションや集中力は飛躍的に高まります。ほめ言葉を効果的に使って、児童が「英語が通じた!」「英語がわかった!」と感じる場面を増やしたいですね。

おさえておきたい定番フレーズ

定番の表現を使いながら、少しずつバリエーションを増やしていくとよいでしょう。Good job. (よくできたね。) You did it. (やったね。) Nice work. (上手にできたね。) I'm proud of you. (すごいね。) Nice try. (がんばったね。) Congratulations! (おめでとう!) などから使ってみましょう。'の部分を長く強めに言うのがポイント。ちなみに、「ハイタッチ!」はHigh five!と言います。

使ってみたいひと言—
Amazing! (すばらしい!)

Amazingは「驚くべき・すごい」という意味。「ma」[mei]の部分を強めにゆっくり言うと、気持ちが込もった言い方になります。もちろん笑顔も忘

れずに。また、amazingの前にsoをつけるとさらに意味が強くなります。ネイティブ・スピーカーは、より強調するために、AAAmazing!のように冒頭を伸ばして言うこともあります。

★ワンポイント・レッスン

児童の良いところを、より具体的に評価すると効果的です。Good, Great, Niceなどの後に、以下のように単語を加えてみましょう。

Good thinking / idea / eye contact / voice / gesture / answer. (良い〜だね。)

また、ほめ言葉も表現によって度合いが異なります。ただし、使う人によってニュアンスも違うので、あまり厳密に考えず、以下のようなレベルに分けて考えるとよいでしょう。(左に向かってほめる度合いが強くなります。)

Amazing.
Wonderful.
Fantastic.

Excellent.
Great.
Way to go.

Good job.
Well done.
Nice work.



Steve T. Fukuda
日米の両方で教育を受ける。高校教員を経て、教員養成に携わるために大学の教員となる。モットーは「思いやり」と「恩送り」。

←数字、色、アルファベットなど、リスニング活動に使えるビンゴシートです。

※ WEB サイトで他のバージョンもダウンロードできます。

教育出版 小学校英語

検索



タブレットを使った反転学習の試み

一生き生きとコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成を旨として—

■千葉県鴨川市立田原たばら小学校の実践

鴨川市では、平成27年度から田原小学校に40台のタブレットを導入し、「チャレンジ学習」として、家庭で外国語活動の予習を行うという反転学習の活用に取り組んできました。

研究2年目のまとめとなる公開研究会*1より、授業の様子をレポートします。

先生が登場する手作り動画で予習

6年生の授業では、研究主任でもある学級担任の渡邊知子教諭が単独で授業を行いました。渡邊教諭は冒頭から英語を駆使して、児童を授業に引き入れていきます。挨拶、天気・曜日・月日の確認、英語の歌を歌って、本時の本題に入りました。

“Who was in the video?” 渡邊教諭が問いかけます。ビデオとは、「チャレンジ動画」と呼ぶ英語の予習動画のこと。高学年の児童は、動画が入ったタブレットを自宅に持ち帰って視聴し、わかったことをワークシートに記入して授業に臨みます。



タブレットに入れ児童に渡す予習動画の例

動画は先生たちの手作りです。平成28年度は、授業に向けて、ALT（外国語指導助手）や校内の先生方が登場する動画を作成。授業者自ら原稿作成、撮影、編集に取り組みました。主に次の授業で扱う語彙をALTが教えてくれたり、先生方の英語のやりとりを見たりする内容になっています。

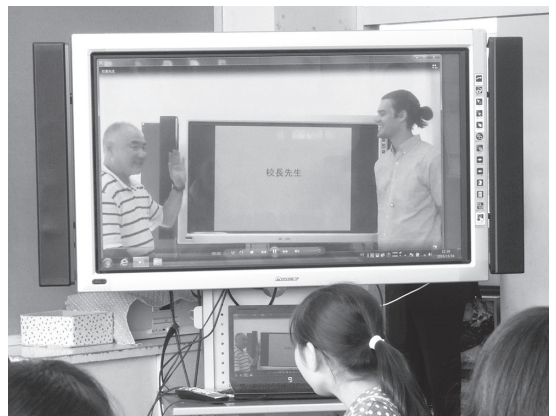
身近な先生方が登場することで、児童は「〇〇先生はどんな場所に行きたいのかな」など、内容に興味をもって予習に臨め、授業時までターゲットと

なる表現を何度も聞く機会をもつことができます。また、表現の導入の時間が大幅に短縮されるため、アクティビティの時間を最大限確保でき、その質や量の向上を図ることが、コミュニケーション能力の育成につながってきたと先生方は考えています。

校長先生も動画に特別出演

この日のための予習動画は、ALTからの“Where do you want to go?”（どこへ行きたい？）の問いに対して、各先生が“I want to go to I want to see/eat/get”など、行きたい場所を、その理由（見たいもの、食べたいもの、おみやげに買いたいものなど）とともにALTに紹介するというもの。先生方をモデルに、児童は卒業旅行で行きたい場所としたいことを考え、友達に伝える準備をしてきました。

この活動に入る前に「スペシャル・ムービー」として井藤いとう機向きむかう男校長が動画に登場。ALTの先生の“Where do you want to go?”に対して、“I



校長先生登場の動画に児童は興味津々

want to go to Asakusa. I want to eat *dojo* (どじょう).”と答えます。

本時の目標は、友達の発話に積極的に反応したり、質問したりすることです。この動画によって「え、どじょう?」「どんな味?」など、児童からの自然な反応や質問を引き出すことをねらいました。

あいつちや質問で会話を広げる

行きたい場所と理由を伝え合うメインの活動に入るにあたり、渡邊教諭は自らモデルを示した後、友達の発表に対して「ひとつ以上は質問をしてみよう」と投げかけます。

さらに、「値段は?」「(建物の)高さは?」など、頭に浮かんだ質問を英語で言えるように表現を紹介し、会話を広げていけるように促しました。



表情豊かに授業を進める渡邊知子教諭

ペアでの活動が始まりました。児童はタブレットに入れた画像を使いながら、個性豊かな行きたい旅行先とその理由を紹介します。京都に行きたいある児童は“I want to try *Maiko-taiken*.”(舞妓体験がしたい)と紹介。ユニークなおみやげの名前もたくさん登場し、感心したり、あいつちを打ったり、ねらいつ通りに質問をしたりする姿も多く見られました。

活動後の振り返りでは、「○○さんの発表を聞いて沖縄に行ってみたくと思った。海の写真がきれいだったから」と内容に関心を持った様子や、「次は



魅力が伝わるように画像を使って紹介

簡単な質問が言えるようにしたい」など、次回への取り組みにつながる声が聞かれました。

チャレンジ学習の成果とこれから

予習動画の工夫によって、ほとんどの児童は、自宅での課題によく取り組んでいるとのこと。動画作成の負担など課題もある一方で、授業への意欲づけ、コミュニケーション活動を重視した授業の実現、英語をたくさん聞く機会の保証など、先生方は研究の手ごたえを感じています。

「本校の研究は、『^{ちよう}流暢に英語を話すことができる』ことよりも『英語を使ったコミュニケーションを楽しむことができる』ことを重視しました。聞き手のリアクションやジェスチャー、表情など、外国の文化に学ぶことはたくさんあります。それらを教師が自ら示しながら授業を行うことで、児童はそのまねをするようになりました。正しい文法でなくても、相手に伝えたい、相手を理解したいという気持ちにさせる教材開発・予習動画が本校の宝となっています」と、2年間の研究を振り返り、渡邊教諭は話します。

「外国語活動におけるICT活用と反転学習の試みとして、田原小学校の研究はたいへん貴重で可能性に富むもの」と、指導にあたった金森 強教授(文教大学教授)。貴重なノウハウと教材の蓄積が、今後の外国語教育に生かされていくことが期待されます。



図画工作と連携した外国語活動の実践

■中嶋 美那子 (東京都目黒区立田道小学校)

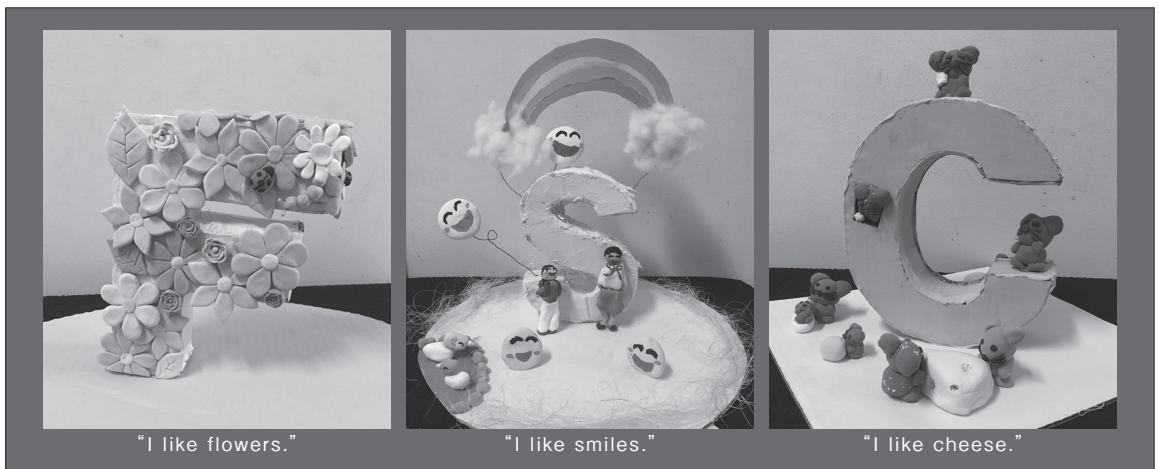
他教科との関連でより深い学びを

本校は、外国語活動を通してコミュニケーションの楽しさを培うことを主題とし、目黒区外国語教育モデルカリキュラムを活用しながら2年間研究を続けてきました。コミュニケーションの楽しさは互いの気持ちが通じ合えた時に感じるすることができます。主体的にコミュニケーションを図れるような場を設定し、英語を使って人と通じ合えた経験を積み重ねるように工夫しています。

外国語活動を他教科・領域と関連させて、より深い学びを追究することは大切な工夫のひとつです。右記の図画工作の授業は、その一例です。また、行事や児童集会などに英語を取り入れたり、英語表示を校内環境に取り入れたりして、英語が特別なものではなく、児童の生活の中に自然となじんでいくように、多方面からアプローチしていくことも楽しさにつながると考えています。

本校は、「チーム田道」として、担任だけでなく全職員を挙げて外国語活動に取り組んでいます。ALT (外国語指導助手) から受けるショートレッスンを生かして、大人も英語で学ぶことを楽しんでいます。

児童の思いの込められた作品例



“I like～.”の世界を立体で表現

“I like～.”外国語活動でよく使われる表現です。授業では、できるだけ必然性をもたせ、意味あるやり取りを心がけています。しかし、児童の伝えたいことは外国語活動の時間だけに留まり、そこからの深まりはあまり見られませんでした。

そこで、図工専科・山田秀子主幹教諭は、第6学年において“I like～.”を題材にした授業を展開しました。外国語活動で慣れ親しんだアルファベットを使い、好きなものの頭文字を立体にし、周りに何を構成するかで自分の世界観を表現しました。

児童は、“What do you like?”と問われ、“I like～.”を言葉ではなく、様々な材料や表し方で構成し、高学年らしい知的的好奇心と造形感覚を働かせて作り上げました。

でき上がった作品は「私の好きなもの」ではなく、あくまでも“I like～.”の世界なのです。“I like smiles.” “I like cheese.” 児童にとって“I like～.”はとても価値ある言葉になりました。作品は本校玄関や廊下に展示され、お客様をお迎えしたり、児童の気持ちを和ませたりしています。

<http://www.meguro.ed.jp/medendeh/>
田道小学校のHPでは、外国語活動のモデルカリキュラムや振り返りカードなども掲載しています。



連載

豊かなコミュニケーションを育むアクティビティ
学級作りにもつながるおすすめの活動を紹介します

【第1回】

Silent Greeting 一言を使わない挨拶でスタート

■遠藤恵利子 (仙台市立向山小学校)

心を通わせるコミュニケーションを

コミュニケーションは、言葉を使う以前に好ましい人間関係があること、「関わるのが楽しい」と感じられるようであれば成立しないと考えます。私の授業は、Silent Greeting 一言を使わない挨拶—で始まります。「ノンバーバルなコミュニケーションで心を通い合わせ、心地よい関係を築く、そこに生まれる楽しさやうれしさを感じる」ことからスタートです。子どもの所属する場所（コミュニティ）、相手意識を育むことを大切に活動として、授業の始まりに位置づけています。

Silent Greeting

▼進め方

- ① Silent Greeting は言葉を使わずに行う挨拶です。まず ALT/HRT とボランティアの子どもがデモンストレーションを示します。
- ② HRT が “Let’s greet!” と言い、子どもたちが “How many people?” とたずねます。最初にお手本を示した子どもが “Two people, one boy and one girl.” などと挨拶をする人数を伝えます。
- ③ 互いに手を振るなどしてペアを作ります。相手と言葉を使わずに握手 (handshaking) だけで挨拶をします。顔を見合ったり、表情や握手のしかたに思いを込めたりします。異なるペアで同様に行い、①で指定された人数と挨拶ができれば席に戻ります。Silent Greeting の後で、言葉を使った挨拶も行います。

好ましい関わり方を具体的に評価

この Silent Greeting は毎時間行い、定着させていきます。その度に子どもの様子を見ながら、「〇〇さんは進んで挨拶していたね」「握手のしかたがやさしかったね」「笑顔で楽しい気持ちが伝わってきたね」など、好ましい関わり方を具体的にほめて評価を加えます。

好ましくない態度があれば、活動の途中でもストップし、HRTとALTで良い例や良くない例を演じて示すなどして、より良い関わり方に気づかせます。

子どもの実態やクラスの人数、時間配分等に応じて「男女両方と」「昨年違うクラスだった人と」など、条件も加えていきます。慣れてくると、子ども自ら条件を示すこともできるようになります。

さらに「幼稚園児」「お年寄り」「転校してきた新しい友達」「思わぬところで会った友達」「困ったときに助けてくれた人」など、相手意識を育むために、挨拶する相手を設定する場合があります。具体的な相手を想定することで、自分の思いを伝える工夫を考えさせることにつながっていきます。



ふれあって
心もほぐれる
Silent Greeting

英語教育改革に向けて ——小学校の先生方へ



この度の小学校外国語教育の教科化・早期化は、「外国語教育の抜本的強化」の一面も担っています。英語教育改革を推進してきた松本 茂先生から、小学校の先生方へのメッセージをお届けします。

撮影：藤田 浩司

まつもと しげる
松本 茂

立教大学グローバル教育センター長

立教大学経営学部国際経営学科教授，同大学グローバル教育センター長。専門はコミュニケーション教育学。NHK テレビ「おとなの基礎英語」講師，中央教育審議会初等中等教育分科会委員，大学入試センター「英語四技能実施企画部会」副部長，東京都英語教材 *Welcome to Tokyo* 編集委員長，「東京英語村（仮称）」英語プログラム監修者も務めている。

英語教育改革 最後のチャンス

学習指導要領改訂案が発表されました。その内容をご覧になって、ワクワクされている小学校の先生もいらっしゃると思いますが、一方で、ため息をついたり、憤慨したりしている先生もいらっしゃることでしょう。

外国語活動が3・4年次へと早期化され、5・6年次の外国語（英語）が教科になるだけでも大変なのに、道徳も教科化され、プログラミング教育なども加わり、そのうえ授業時間数が減る科目がないのですから……。

日本の初等教育のレベルの高さは世界が認めるどころです。これを可能にしてきたのは、小学校の先生の優秀さ、勤勉さの賜物であることは今さら申し上げるまでもないことです。

しかし、先生たちのご負担は年々増えています。今回の改訂案を実行に移すにあたり、1クラスの生徒数の削減、作成すべき文書の削減、長期休暇の確保などの施策も同時に採択すべきだと考えています。

このように小学校の先生方へのご負担が心配です

が、今回の英語教育の改革は「最後のチャンス」であり、「オールジャパン」で臨む必要があります。そして、英語教育に永年携わってきた者としては、「今回は成功するかもしれない」という期待感があるのです。

グローバル化の中 子どもたちの将来のために

早期から外国語にふれることが、母語を含めた言語能力の育成に有益だと言われています。そして、小学校での外国語活動のおかげで、日本の子どもたちは英語を「使う」ことを恐れず、楽しむようになってきました。先生方の経験・知見を活かし、さらに早い段階でスタートさせることで、生涯学習年限（時間）を長くし、高校卒業時の到達レベルを引き上げることが可能になると考えられます。

現在、英検2級/GTEC CBT*¹ 1000点レベル（CEFR*² B1）の英語力を有している高校3年生の割合は8%未満というデータがあります。これでは多くの大学が進めている「専門教育の英語化」は成功しません。さらには、企業ではグローバル化が進展し、英語ができないと今まで以上に不利になる状

*1 GTEC CBT: 高校生のための英語4技能を測定する試験。

況です。

今回の学習指導要領改訂という10年に一度のチャンスを逃してしまうと、次の10年後となります。そうなると、生徒たちが大人になった時に大変苦労することになることは間違いありません。

「オールジャパン体制」で臨む 英語教育改革

小学校での英語教育が早期化されることで、中学校のスタートのレベルが上がります。そして、中学では指導する語数が現行の1200程度から1600～1800程度となり、授業は原則英語で行うこととなりますので、中学校の先生たちの負担も増えます。中学卒業時の英語力を向上させることにより、高校での教育が高度化します。

そして、英語の授業が必修科目しかない工業高校などの一部の高校を除けば、高校卒業時にはほとんどの生徒が英検2級/GTEC CBT 1000点レベルの英語力を有している状態をみざるのです。

また、英語の4技能（聞く、読む、話す、書く）をバランスよく育成していきます。特に「使える英語力」の育成に力を入れるため、高校では「論理・表現Ⅰ～Ⅲ」を新設します。高校の先生たちの多くが苦手な「生徒主体の活動」を多く取り入れる必要があります。

2020年度から 大きく変わる大学入試

さらに大学入試も変えます。これまで、一部の中学校で、そして多くの高校において「リーディング（英文解釈）」中心の授業が行われてきました。このよりどころとなっていたのが入試問題です。センター試験に関しても「リスニング」が50点である一方で、他の筆記問題が200点と、リスニングが軽視されています。

さらに、筆記問題にある「発音・アクセント」「文法・語法、語句整序、応答文完成」「対話文空所補充」の問題によって「スピーキング」と「ライティング」

の力を間接的に測ってきました。実際に話すわけでも、書くわけでもない「間接的に評価する問題」が、「受験英語」というおかしなジャンルを作り上げてきたのです。

この点を改善するために、平成32年度（2020年度）から民間の4技能テストの結果を活用すべく、文部科学省と大学入試センターの会議において議論しているところです。生徒たちが実際に「話したこと」「書いたこと」を評価するテストを活用することになるはずで。

これに先立ち、立教大学では全国で初めて、全ての学部・学科の入試において民間の4技能テストの結果を利用した入試を平成27年2月に開始し、今年も引き続き実施しました。他の私立大学における入試でも民間のテストの活用が進んでいます。

入試といえば、東京大学や京都大学も昨年「推薦入試（特色入試）」を始めました。今年合格した生徒たちのアピールポイントを見ると、「全国高校生英語ディベート大会」や「全日本高校模擬国連大会」などでの活躍、海外留学体験、英検1級取得、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）やスーパーグローバルハイスクール（SGH）の研究成果を海外において英語で発表したことなどが含まれています。日本のトップ大学も、少しずつではあるものの高校生の英語での体験を評価するようになってきました。

積極的に英語を使う 子どもたちの育成を

このようにして今、英語教育を改革するための「オールジャパン体制」が整いつつあります。小学校の先生方にはご負担をおかけしますが、このような背景もあつての外国語活動の早期化と英語の教科化であることをご理解いただき、積極的に英語を使おうとする子どもたちを引き続き育てていただければ幸いです。

私も、文部科学省や地方自治体での会議や文筆活動を通して、小学校の先生の負担軽減につながる施策やシステムの導入を訴え続けてまいります。



小学校英語関連書籍 刊行予定

Q&A 小学英語指導法事典

教師の質問 112 に答える

小学校英語の教科化に向けた教師たちの
質問や悩みに、理論と実践の両面から答える。
好評『Q&A 中学校英語指導法事典』の小学校版。

樋口忠彦・高橋一幸・加賀田哲也・泉 恵美子 編著
A5判／288 ページ／予価：本体 2,800 円＋税
(2017 年 7 月刊行予定)

主体的な学びをめざす 小学校英語教育

—教科化からの新しい展開—

小学校英語の教科化を踏まえ、「主体的な学び」を
キーワードに、具体的な展開の仕方を提示する。

- 第1章「小学校英語教育の新しい展開」
- 第2章「主体的な学びをめざす授業づくり」
- 第3章「主体的な学びをめざす実践例」

金森 強・本多敏幸・泉 恵美子 編著
A5判／216 ページ／予価：本体 2,400 円＋税
(2017 年 8 月刊行予定)

Smiles

◎創刊にあたって

小学校の外国語教育が大きく変わろうとしています。平成32年度から高学年では教科になり、「読むこと」「書くこと」も加わり、「慣れ親しむ」だけでなく定着も求められるようになります。筆記テストやパフォーマンステストも行われるでしょう。外国語活動で、先生方が大切にしてきたもののひとつに児童たちの「笑顔」があります。教科になっても、「通じ合う、伝え合うコミュニケーションを旨とする」は変わりません。「学ぶ喜び」「できた喜び」も含め、児童の笑顔がたくさん生まれる授業でありますように。そんな願いを込めてSmilesをお届けします。

教育出版英語編集部

小学英語通信 ONE WORLD 小学校英語応援マガジン Smiles 〔創刊号〕 2017年4月10日 発行

編集：教育出版株式会社編集部

印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：山崎富士雄

表紙イラスト：クドウあや

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

電話 03-3238-6864(内容について) 03-3238-6901(配達について)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2
あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東恵比寿2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411